

Divyāvadāna 第1章の文献学的問題点

——根本説一切有部毘奈耶との比較——

平 岡 聡

1988年、カウエルとネイルが複数のネパール写本に基づき、Divyāvadāna (Divy) の校訂本を出版した後、新たに Divy. の名を冠する写本の存在が幾つか確認されている。従って文献学的には、現存する写本を総て校合し、その異読を確認する作業が必要であることは言うまでもない。しかしそれにも増して必要不可欠なのは、彼らが Divy. を校訂した当時、その梵本の存在が知られていなかった根本説一切有部毘奈耶 (MSV) との比較である。何故なら MSV. は Divy に見られる多くの説話の源泉と考えられるからである。この MSV. の写本と、またその蔵訳や漢訳との比較により、従来、文献学的に問題があるとされてきた箇所を読みが可能になる。そこで本稿では Divy. 第1章 Koṭīkarṇāvadāna を、この説話の源泉と考えられる MSV. の皮革事の説話と比較し、その問題点を指摘してみたい。基本資料として次のものを用いる。

- Divy : edited by E. B. Cowell & R. A. Neil, Amsterdam, 1970, pp. 1-24.
- MSV : Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition), Śatapiṭaka Series, Vol. 10(6), reproduced by R. Vira & L. Chandra, New Delhi, 1974, folio 180b6-188a3. [ダット本は校訂が悪いので、ここでは用いない]

Tib. 1030 Khe 237a4-251b5 (Peking) [sDe-dGe 1 ka 251b4-268a5]

Chi. 『根本説一切有部毘奈耶皮革事』(大23, pp. 1048c-1053c)

【1】 先ず最初に問題になるのが、この話の舞台となる場所である。Divy. には asmāt parāntake (1.5), asmāt parāntakeṣu (19.16-17) [asmāparāntakeṣu AB; asyāparāntakeṣu CD], asmākam aparāntakeṣu (19.19), asmāt parāntakeṣu (19.23) [asmāparāntakeṣu ABCD] とあり、Divy. の校訂者はこれを固有名詞と解釈せずに「ここから西の外れに」とするが、MSV. は一貫して āsmāparāntakeṣu (186b2×2, 186b3) 「アシュマ [国] の外れに」とする。蔵訳は rdo can zhes bya ba'i yul gyi mtha' na (237a4; 248b3, 4, 5) 「アシュマ国の外れに」とし、MSV. の読みに一致する。漢訳には「阿濕婆蘭德伽國」(1052c

8) とあり、「アシュマパラータカという国」とする。さて、このシュローナの話は他の漢訳諸律にも見られ、そこでは、『四分律』『阿濕婆阿槃提國』(大22, p. 845b24), 『五分律』『阿濕波阿雲頭國』(大22, p. 144a13-14), 『十誦律』『阿濕摩伽阿槃提國』(大23, p. 178a18) とし、いずれも「アシュマ・アヴァンティー国」と解釈する。従って、この語は固有名詞として理解すべきであり、これはパーリ名では「アッサカー (assakā) として知られる、当時の十六大国の一つと考えられる。よって *asmāt parāntaka* を *āsmāparāntaka* と改める。

【2】主人公のシュローナとなるべき有情が母の胎内に入る前に、Divy. には次のような文章が見られる。

*anyatamaś ca sattvaś caramabhavikaś ca hitaiṣi * gṛhitamokṣamārgāntanmukho* [-mārgānte sukho A; -mārgānte mukho D] * *na nirvāṇe bahirmukhaḥ * saṃsārād anarthikaḥ * sarvabhavagativyupapattiparānmukho * 'ntimadehadhārī* [-vyupapatte' ntimadehe A; -vyupapattye 'ntimadehadhārī D]...*kukṣim avakrāntaḥ* (1. 19-2. 3)

さてある最後生の有情が〔有情の〕利益を望み、一度決めた解脱道の究極に向かい、涅槃から顔を背けず、輪廻は望まず、〔三〕有〔五〕趣のいずれに再生することからも顔を背け、最後の身体を持して母胎に入った。

またこれに対応する MSV. の箇所には、*anyatamaś ca satvaś caramabhavikaś caritaiṣi * gṛhitamokṣagarbho * ntarmukho nirvāṇe * bahirmukhaḥ saṃsārād * anarthikaḥ sarvabhavagaticyutyupapattiṣu* (181a1-2) 「さてある最後生の有情が行に専念し、解脱の核心を掴み、涅槃に顔を向け、輪廻からは顔を背け、〔三〕有〔五〕趣のいずれにも落ちて再生することを望まず」とある。下線部は、Divy. の *ca hitaiṣi* が、MSV. で *caritaiṣi* となっている。Divy. の読みでは、ここに *ca* があるのは不自然であり、また蔵訳は *spyod pa tshal ba* 「行を求め」とあるので、MSV. の如く *caritaiṣi* と読む。また Divy. ではこの後、各写本間に混乱が見られ、その内容が把握し難い。これを各成分毎に纏めると上の如く * 印の箇所で切れ、落ち着きが悪くなる。ところが MSV. も同じく各成分毎に纏めると、上の如く * 印の箇所で切れ、特に *antarmukho nirvāṇe* と *bahirmukhaḥ saṃsārād* の部分が対句になるので、この方が構文的に自然である。漢訳はこの部分を欠くが、蔵訳は *srid pa tham pa'i sems can spyod pa tshol ba/ thar pa'i snying bo bzung ba/ mya ngan las 'das pa la mngon du phyogs pa/ 'hor ba las phyir phyogs pa/ srid pa tham ba'i* [D. *srid pa*

pa'i] 'gro ba thams cad du 'chi 'pho dang skye ba don du mi gnyer ba/(237b5-6)「最後生の有情が行を求め、解脱の核心を掴み、涅槃に向かい、輪廻には背を向け、あらゆる生存の趣に死に移って再生することを望まず」とし、MSV. に一致するので、次のように Divy. の読みを改める。

ca hitaiṣi (→caritaiṣi) grhitamokṣamārgāntonmukho (→mārgānta unmu-kho, or -mārgo 'ntarmukho) na (→om.) nirvāṇe bahrmukhaḥ saṃsārād anarthikhaḥ sarvabhavagativyupapattiparāṇmukho (→vyupapattiṣu).

【3】 シュローナとなるべき有情を身籠もった長者の妻は出産するまで大切に養われるが、その中に次のような一節が見られる。

apsarasam iva nandanavicāriṇīm mañcān mañcaṃ pīṭhāt pīṭham avatarantīm uparimāṃ bhūmim/ (2. 22-23)

〔彼女〕はナンダナ園を浮遊する天女の如く、床から床へ、台座から台座へと、上の大地に降りてきた」

これは金持ちの妻が妊娠した時の定型句であるが、「床から床へ、台座から台座へ」という文脈からして、下線部分が不自然である。Divy. にはこの他にも同じ定型句が3例存在するが、そこでは *avatarantīm adharimāṃ bhūmim* (99. 15), *avataranti [anavataranti BC] adharimāṃ bhūmim* (167. 13-14, *avatarantīm adharimāṃ bhūmim* (441. 5) とあり、統一が取れていない。ところが MSV. には *anavataranti adharimāṃ bhūmim* (181a7) とあり、「下の大地に降りることはなかった」としている。蔵訳は *shod kyi sa bzhir [D. gzhir] mi 'bab ste* (238a6)「下の地面に降りることはなく」、また漢訳も「足不履地」(1049a10)「足は地を踏むことはなかった」とし、MSV. の読みに一致する。また同じアヴァダーナ文献の *Avadānaśataka* (ed. by Speyer) にも *anavatarantīm adharimāṃ [or adharāṃ] bhūmim* (I, 15. 6; 197. 7-8; II, 74. 1-2; 181. 3) とあるので、Divy. の読みもこれに一致させて *avatarantīm uparimāṃ bhūmim* を *anavatarantīm adharimāṃ bhūmim* と改める。

【4】 成長したシュローナは様々な勉強をし、八つの鑑定術に精通したとある。

vastupariṣāyāṃ ratnapariṣāyāṃ so 'ṣṭāsu pariṣāsūḍghaṭako (3. 19-20)

彼は、物品の鑑定、宝の鑑定、という八つの鑑定術に通達した。

しかしここに列挙されているのは「物品と宝」の二つだけであり、他の6項目を補う必要がある。これも定型句であり、Divy. にも他に4例 (26. 12-14, 58. 17-19, 100. 2-4, 441. 28-442. 1) が見られるが、いずれの定型句も統一を欠く。しか

し MSV. には *vastupariṣāyām vastrapariṣāyām ratnapariṣā[yām hastipa]rikṣāyām aśvapariṣāyām stripariṣāyām puruṣapariṣāyām dārupariṣāyām* (181b2-3) 「物品の鑑定, 衣の鑑定, 宝石の鑑定, 象の鑑定, 馬の鑑定, 女の鑑定, 男の鑑定, 木材の鑑定に」とあり, また蔵訳にも *bzhi [D. gzhi] brtag pa dang/ ras brtag pa dang/ rin po che brtag pa dang/ glang po che brtag pa dang/ rta brtag pa dang/ bud med brtag pa dang/ skyes pa brtag pa dang/ shing brtag pa la* (238b6-7) 「物品の鑑定, 衣の鑑定, 宝石の鑑定, 象の鑑定, 馬の鑑定, 女の鑑定, 男の鑑定, 木材の鑑定に」とあるので, Divy. の *vastu° ratna°* を *vastu° vastra° ratna° hasti° aśva° stri° puruṣa° dāru°* と改める。漢訳は「馬の鑑別」を欠く (1049a25-26)。

【5】 成人したシュローナは隊商主として航海に出る決意をするが, 父は彼に「お前は隊商の前や後ではなく, 中央を行け」と助言した後, 次のように言う。

na ca te sārthavāhe hataḥ sārtho vaktavyaḥ (4.22)

後半部分は問題ないが, 前半の下線部が理解し難い。そこで MSV. を見ると, *hate sārthavāhe hataḥ sārtho vaktavyaḥ* (181b9) 「隊商主が殺されれば, 隊商〔も〕殺されたと言わねばならない」とあり, また蔵訳は, *ded dpon bcom pas ni tshong pa rnams bcom zhes bya'o//* (239b4) 「隊商主が殺されれば, 商人達〔も〕殺されたと言わねばならない」, 漢訳も「若商主被損。商衆總損」(1049b19) 「若し隊商主が損なわれれば, 商人達総てが損なわれることになる」とあるので, *na ca te sārthavāhe* を *hate ca sārthavāhe* と改める。

【6】 シュローナは航海から帰った後, 餓鬼の域に迷い込む。そこで様々な餓鬼に遭遇し, いかなる悪業のために餓鬼の世界に生まれたのかと尋ねると, 餓鬼達は偈文を以て次のように答える。

ārogyamadena mattakā ye dhanabhogamadena mattakāḥ/

dānaṃ ca na dattam aṇv api yena vayaṃ pitṛlokam āgataḥ// (9.3-4)

健康の驕りに酔い, 富や財の驕りに酔いしれた我々は,

僅かの布施もしなかったために, 餓鬼の世〔界〕にやって来たのだ。

この詩形は *mātrācchandas* の *vaitāliya* であるが, 下線の部分に Divy. と MSV. とで異同が見られる。即ち Divy. の *ye dhana°* は MSV. では *yauvana°* (183a2) となっている。いずれにしても *mātrā* の量に変化はないが, Divy. の読みだと, *ye* という関係詞を *d-pada* の *vayam* に掛け, 上に挙げたような訳が見つかるが, この場合 *c-pada* の *ca* が生きてこない。一方 MSV. の読みを取る

と、a, b-pada と c, d-pada とに分けて解釈できるから、ca という接続詞も生きてくる。また ārogya, yauvana, jivita はパーリ經典等で三つの驕り (mada) としてよく列挙されるので、ye dhana° を yauvana° に改める。蔵訳も lang tsho longs spyod dregs myos te/ (242a1) 「若さの享受という驕りに酔って」とし、MSV. に一致する。漢訳の対応箇所はない。

【7】 またシュローナは別の餓鬼の城で別の餓鬼に会い、その餓鬼が四匹の犬に食べられているのを目撃するが、ここで次のような一節が見られる。

prṣṭhavaṃśān utpātyotpātya bhakṣito (9.25)

〔四匹の犬達は、その男の〕背骨を粉々に砕いて食べた。

ところが MSV. の対応箇所では、下線部が prṣṭhavarrāṇy (183a7) としか読めず、意味不明である。-āni という語尾変化を取っているのも、この語は中性名詞と考えられるが、prṣṭhavaṃśa であれば、これは男性名詞であるから性が合わない。そこで蔵訳と漢訳とを見ると、sha spags [D. lpags] (242b1) 「背中の肉」、「背肉」 (1050b11) とあるので、prṣṭhamāṃsa という中性名詞の Skt. が予想される。また Mahāvastu (eb. by Senart) には prṣṭhamāṃsaṃ utpātetha (I, 18.3-4) 「背の肉を引き裂いた」と、同類の表現が見られるので、Divy. の prṣṭhavaṃśān は prṣṭhamāṃsāni に改めた方がよいだろう。

【8】 シュローナの過去物語。クリキン王が入滅したカーシャパ仏の塔を建立し、その塔のために税金を徴収していたが、彼の死後、息子のスジャータが王位に就くと、大臣達はその税金の制度を廃止したいとスジャータに申し出る。そこで彼は次のような一節を以て大臣達を諫めるのである。

yan mama pitrā kṛtaṃ devakṛtaṃ na tu brahmakṛtaṃ tat (22.20-21)

私の父によってなされたことは神によってなされたことであり、梵天によってなされたことではない。

しかしこれでは意味をなさない。そこで MSV. を見てみると、yan mama pitrā kṛtaṃ tad eva kṛtaṃ brāhmākṛtaṃ (187b3) 「私の父によってなされたことはなされたことであり、実に梵天によってなされたことである」とある。これも下線部の kṛtaṃ が余分なように思われるが、この読みの方が遙かに自然である。蔵訳では nga'i yab kyis gang mdzad pa de ni tshangs pas byas pa'o// de ni brgya byin gyis byas pa'o// (250b7) 「我が父によってなされたことは、そのまま梵天によってなされたことである。それは、そのまま帝釈天によってなされたことで〔も〕あるのだ」とあり、漢訳でも「我父先王所作之事。如釋梵天王」

(1053b9-10)「我が父の先王がなしたことは帝釈天や梵天〔のなしたこと〕と同じである」とし、いずれも梵天だけでなく帝釈天にも言及していて、若干の異同はあるが、いずれも「だから父の決めたことを勝手に変えてはならない」ことを示唆する内容になり、文脈によく合う。よって Divy. の devakṛtaṃ na tu brahmakṛtaṃ tat を tad eva brahmakṛtaṃ に改める。

【9】 連結の部分では業とその異熟に関する定型句が見られる。

ekāntaśuklānāṃ dharmāṇāṃ ekāntaśuklo vipākaḥ (23.28-29)

完全に白い法には完全に白い異熟がある。

MSV. では ekāntaśuklānāṃ ekāntaśuklo (188a2) とあり、問題の語は省略されている。蔵訳も gcig tu dkar ba rnam kyī ni rnam par smin ba ni dkar ba yin no (251b3)「完全に白い方の異熟は白いのである」とするが、漢訳では「若作白業。得白果報」(1053c2)「若し白い業をなせば、白い果報を得る」とする。Divy. の他の箇所でも ekāntaśuklānāṃ karmaṇāṃ ekāntaśuklo vipāko (55.10), ekāntaśuklānāṃ karmaṇāṃ ekāntaśuklo (135.22) となっているので、Divy. の dharmāṇāṃ は karmaṇāṃ でなければならない。

本稿では Divy. を MSV. やその蔵訳・漢訳と比較することによってのみ、Divy. が孕んでいる、文献上の問題を指摘し、その読みが不明確な部分の解説を試みるに留まった。従って、Divy. の校訂者が用いなかった Divy. の写本を総て参照し、その異読や文献上の問題点を確認する作業は今後の課題としたい。

※ 写本の読みに関しては仏教大学・山極伸之先生に御協力を、また発表に際しては神戸女子大学・岡田真美子先生に有益な御指摘を賜った。謝意を表する。

〈キーワード〉 Divyāvadāna, Mūlasarvāstivādinaya, avadāna

(仏教大学講師)